

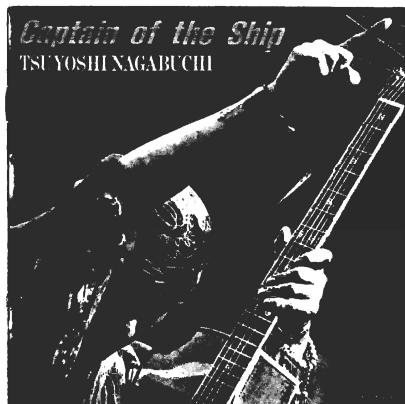
‘ό κόσμος, ἀλλοίωσις· ό βίος, ὑπόληψις.’

105号 1994.6.17

文・編集・発行

恋怪子

CD:長渕剛『家族』『Captain of the Ship』



今年1月、何気なく入ったレコード店の店頭に『家族』が積んであった。長渕剛のアルバムを最後に買ったのは、1986年10月に出た『STAY DREAM』だったから9年ぶり。CDを買って帰り、すぐかけた。1曲目の『三羽ガラス』のギターが聴こえたとたん、まだ歌がはじまらないうちから、もう、ぶわーっと涙がこみあげてきた。あー、なんて真っ直ぐなんだ。そうだ！『STAY DREAM』もこうだった。この長渕剛のまっすぐさ。これが好きだったんだ。そのことが一氣によみがえってきた。

9年ぶりに聴く長渕剛は、『STAY DREAM』もそうだったけれど、『STAY DREAM』にも増してきれいなことを歌おうとか、きれいに歌おうとか、そういうことがまったくない。歌の内容も、歌い方も、あまりにも真っ直ぐで、それはもうぶざまといつてもいいくらいで、はじめは聴いていてつらくなる歌もあった。けれども、とともに生きているということは、じつはかっこわるくて、ぶざまに見えたりするものだし、本当のことをつきつめていけば、「きれいごと」はなんの足しにもならないことがわかるてくる。だから、そんなふうに真っ直ぐに生きて、「ぶざま」をさらしている長渕剛は、すばらしくかっこいい。数えきれないほどの幻滅をくぐって、それでもあきらめられないことを追いつけていた、「一人の人間の姿」が、10代や20代の若いロックバンドもかなわない力強さで、目前にすくとたちあがってくる。

『家族』を買ってから1ヶ月くらい後で、イタチのジュンが「『家族』がいいと思ったのなら、これもきっと気に入りますよ」と、1993年に出た『CAPTAIN OF THE SHIP』のCDを貸してくれた。

1曲1曲がゴロゴロとした岩のように存在していて、対決をせまってくれるような『家族』にくらべれば、『CAPTAIN OF THE SHIP』は、歌い方が優しいし、歌詞もじわーっと心にしみいってくる。

『家族』と『CAPTAIN OF THE SHIP』。どっちもよくて毎日のように聴いていたときに、雑誌のインタビュー記事に長渕剛が出ているのを見た。

「ええ、三十歳のときですね。『STAY DREAM』というアルバムを出す前、僕、心臓神経症を患って倒れたんです。ちょうどその頃、いろんなことが度重なったんですね。（略）今まで、女と浮いて、失恋だの淋しいだの恋しいだのばっかり歌ってきたけど、これでいいのかなあと思い始めてブチーンと切れちゃいましたね。自分で何をしていいのか、まったく分からなくなってしまったんです。そこからですよ。僕はものをつくる人間だと自覚して、ヘタな唄は歌えねえなと思って書き始めたのは、『STAY DREAM』以降です」（週刊誌328号「剛唯解の人に会はれり」）

これを読んで、『STAY DREAM』を聴きたくなって、古いレコードを出してかけてみた。『STAY DREAM』は古い感じが全然しなかった。骨格も心臓も『家族』と同じだった。10年近く前に信じたものは、ほんとうに信じるに足るものだったということだし、現在でも信じるに足るものであるということだ。

「事実は、マスコミで書けますけれども、その裏側に真実というものがあるわけです。僕が言いたいのは、事実は語れても、真実は語れないということですね。（略）妙な噂が風化していくとともに、僕はそれと逆行して、真実が浮き彫りにされるような作品を書きたいと思っています」

「今のつくり手は、『言葉』を大事にしなくなっている傾向がありますね。でも、いつの時代にも若い連中は、どちらかと言ふと楽しみより悲しみ、悲痛な叫びみたいなものに飢えている、「本当のことを聞かせてくれ」と思っていると、俺は信じて疑わないんです」（同上）

『言葉』を大事にするということは、ものごとの実体と言葉とのあいだを埋める努力をすることであろう。「本当のこと」を歌うということであろう。そして、その「本当のこと」とはマスコミの書く、いずれ風化してしまうような事実のことではなく、作品に浮き彫りにされているはずの真実であることはいうまでもない。その真実を感知すること。深い共感はそこにだけ生まれる。

『STAY DREAM』以来10年近く、心中ではいつも長渕剛という火が燃えていたのだけれど、それは微妙で、アルバムを買うことにもライブにいくことにもならなかった。それが、『家族』にはふっと手がいった。時間の女神が、「聴いてみたら？」と、あたたかく肩をおしてくれたのだろう。きっとそう。

詩は大事なのだ。少ない言葉の組合せの中に、重層的に意味を込め、こことかしこをつなぎ、自分と他人、今と別時、現実と幻を同じ平面に並べる。人間にとて世界とは事実であると同時に神話であり、観察であると同時に解釈であった。そういう知恵の働きの全体を記述するものは詩しかない。—— 池澤夏樹

LIVE:KILL MUSIC 1994.3.22 新宿アンティック

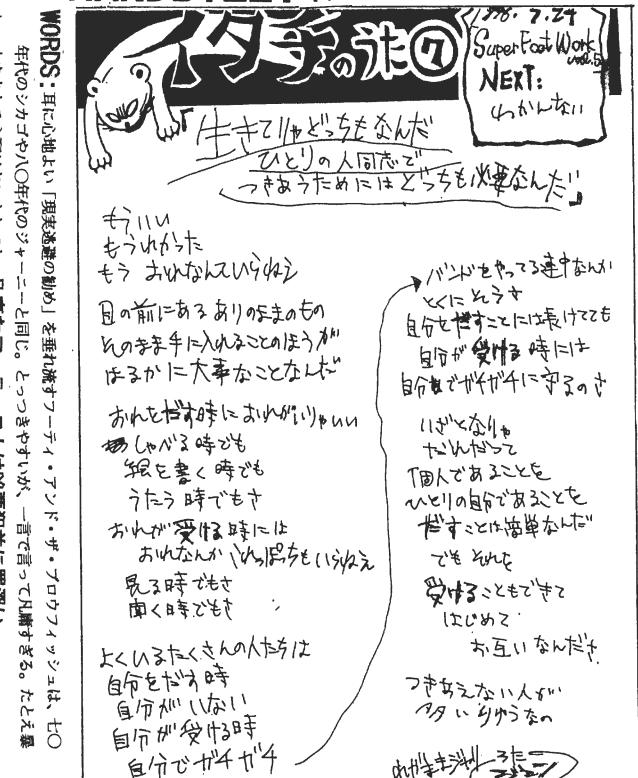
KILL MUSICは、Cangero, jet mock avant-garde、イタチ、のヴォーカルのユニットバンドで、メンバーの3人が、ギター、ベース、ドラムを1曲づつ交代で持ち替え、ヴォーカルも、だれがやるのかその場できめる、というライブだった。

Cangeroのヴォーカルが「きまつた歌詞を歌うってことは、それはだれにでも当てはまるのを歌うことだったりするけど、（自分たちは）いまここでうかんだことを歌う。どれくらいその場のぎができるかってこと」とステージでいっていたが、歌詞がきまつてないだけでなく、ふだんはやらない楽器をアドリブで演奏するのだから、ライブ全体がその場のぎともいえるものだった。それなのに全然でたらめにならず、ステージから強烈なものが伝わってきて、「音楽はこういうものだ」とか、「ライブはこういうものだ」とか、知らず知らずにきめつけたことが壊され、音楽の根本はこういうものだということを分らされた。まさしく、KILL MUSICだった。

そして、KILL MUSICは「本当にやりたいことを今やることに、上手いも下手も関係がないことを実証してみせた。ライブのあとで、イタチのジュンが「誰にでもできることですよ」といっていたが、それはちがう。きめつけもこだわりも一切なくし、その場で自分をつかまえ、それをその瞬間に表現するということは、ほとんど「誰にもできないこと」である。

KILL MUSIC。そうだ、こうだときめつけた音楽なんか殺してしまえ！

HANDBILL:イタチ



POEM:『レコードを割ちまえ』 ジュン(14才)

記憶のミソにまかせて

黙って針をおろすな

おまえはただのプレーヤー

今を語る資格はねえ

選択肢を得るためだけの

情報収集それをまる飲み

おまえはただのレコーダー

自分を語る資格はねえ

プレーヤーにてってても

レコーダーにてってても

大事なものはレコード、レコード

そんなもん割ちまえ

好きなレコードを大切に

もっているのはかまわない

でもそれをプレイするだけなら

おまえは今を生きぬプレーヤー

レコードの数で競うことに

価値を求めるコレクター

今をみる目がまるでなし

すべて知ってる？ 笑わすな

今を生きるってことの

結局ジャマばかり

おまえのアタマ レコード、レコード！

そんなもん割ちまえ

レコードを大事にしそうのおまえは

いつもレコードごしにしか

ものが見えない

ものが聞けない

ものが言えない くそくらえ

おまえをふざぐ レコード、レコード！

そんなもん割ちまえ!!